【調査報告】

荻原雅斗氏とカンボジア・ソフトテニス

浅野　進之介（日本体育大学大学院）

【調査日】一回目：二〇二一年五月二〇日
二回目：二〇二一年九月一五日
三回目：二〇二二年五月一八日

【調査方法】Zoomを用いたインタビュー調査

今回報告する三つのインタビュー調査は、カンボジアで行われているソフトテニス指導の中心人物となる荻原雅斗氏がカンボジアに渡った経緯、そこでどのようにしてソフトテニスとの関わりを持ったかについてを明らかにするため、実施したものである。以下に調査日ごとに実施したインタビューの主要な内容について記載することにしたい。

二〇二一年五月八日、調査を実施する上での情報収集や予備調査のため、日本体育大学横浜・健志台キャンパステニスコートにて行われていた日本体育大学学友会ソフトテニス部の強化合宿に参加し、強化練習の様子を見学した。その強化合宿にはプロソフトテニスプレーヤーの船水雄太氏も参加していた。船水氏はソフトテニスプロチームとソフトテニス選手に特化したマネジメント会社エースマネジメントの共同代表を務めており、もう一人の代表となる人物が荻原雅斗氏である。船水氏に荻原氏とのコンタクトを打診したところ、連絡先を紹介していただいた。荻原雅斗氏は二〇一五年よりソフトテニスカンボジアナショナルチームのヘッドコーチを務めている人物である。カンボジアで実際に指導を行っている人物からの経験談は大変貴重であると考え、早速インタビューの依頼を行った。現在カンボジアナショナルチームは新型コロナウイルスによる影響から活動を休止している状態であり、荻原氏も国内での活動を主としていたことも重なり、五月二〇日に第一回目のインタビューの実施がオンラインにて実現した。

荻原雅斗氏は、二〇一五年からカンボジアナショナルチーム ヘッドコーチに就任した。ソフトテニスの指導に当たりながら、自身の経験をYouTube（1）やSNS（2）などで発信している。その功績はカンボジア、日本のメディアなどでも取り上げられ（3）、競技の愛好者の間では世界で活躍する日本人指導者として一躍有名になっている。現在は、先述した「エースマネジメント」の創設をはじめとし、講習会の開催や競技大会の主催等、ソフトテニスを用いて多岐に渡り活動をしている。

第一回目は、予備調査として荻原氏の活動の様子やカンボジアナショナルチームとの出会いや指導開始のきっかけ、今後の調査への協力依頼を主な内容とし、一時間程度のインタビューを行った。事前に一四項目の質問を用意し、あらかじめメールにて荻原氏に送付した上で実施した。当日は、質問に沿って荻原氏からの話を伺い、その都度追加の質問などを加えた半構造化インタビューを実施した。録音は荻原氏からの許可を得て、Zoomの録音機能を用いて行った。

質問は最初、荻原氏の人生にとってソフトテニスがどのような存在であったかという内容から始まる。荻原氏は小学校三年生の頃から競技者としてプレーをはじめ、大学四年生まで継続されていた。荻原氏は自身にとってのソフトテニスについて「自己表現の場がテニスコートだった」と答えた。プレーヤーとしての限界を感じ、大学の卒業と同時に競技から離れたソフトテニスであったが、やめてみて改めて、自分らしくいられる場であり、自分の気持ちを全面に出すことのできる場所だったと気づいたという。

続いて、カンボジアソフトテニス連盟への関わりについて質問した。事前に調査した新聞記事に「二〇一四年にカンボジアに渡り、飲食業をした後、カンボジアの連盟からの打診を受け、コーチに就任した」という内容が書かれており、この内容についての事実確認を行った。荻原氏の話によれば、渡航したのは二〇一三年で、カンボジアソフトテニス連盟ができたのが二〇一四年であった。もともと大学を卒業した時点でソフトテニスに関わることはないと考えており、海外では飲食業に就いていた。そのうちにカンボジアにてテニスコートを作成する機会があり、その様子を国のカンボジアオリンピック委員会の人びとに見せたことがあった。その際に帯同していたカンボジアオリンピック委員会の会長からできたばかりのソフトテニス連盟を紹介されたという。

インタビューの後、伺った話に荻原氏のブログなどの情報を加えて整理すると、詳細は以下のようになった。

二〇一二年春頃、大学四年生となり既に就職内定先を決めていた荻原氏のもとに、当時カンボジアにてコンサルティング業を務めていた高校時代からの友人からの誘いが来たことをきっかけにカンボジアへの渡航を志すようになる。荻原氏は内定を取りやめ、誘ってきた友人の所属する会社に就職した。国内での事前の勤務の後、二〇一三年五月三日にカンボジアに渡航した。仕事の内容は日本食飲食店の開業であり、

五月二八日に最初の店を開店させた。休業等を挟みながらも徐々に繁盛するようになり、七月三〇日にはバーを新たに開業させるなど、荻原氏の仕事は軌道に乗り、順風満帆の生活を送っていた。

二〇一四年に入ると、荻原氏はふと自身がカンボジアに来た意義を再考する。飲食店の客は大半が現地に住む日本人であり、カンボジアの人々との交流ができていなかった。カンボジアの人々に何か自分を表現したいと考えたとき、かつて自分が自己表現の場としていたソフトテニスに改めて関わること決めた。現地にて会社を経営する元硬式テニス選手と知り合い、硬式テニス・ソフトテニスの競技普及を目指し「Field of Zero」を立ち上げた。スポーツを通じて「人生を自らの力で切り拓いていける体験」、「夢を描くことの素晴らしさ。チームワーク、規律の大切さを学ぶ環境づくり」を学ぶ場を提供した。ソフトテニスの用具等は日本でしか市販されていないため、SNSなどを通じて中古のものの寄付を募った。テニスコートは農地の一角に漁業用の網をネットの代わりとして張り、一からテニスコートを作り上げた。

二〇一五年七月、こうした活動についてカンボジアオリンピック委員会への報告会が行われた。ここで会長からカンボジアソフトテニス連盟の存在について、そしてコーチへの打診について話を受けた。このようにして荻原氏はカンボジアソフトテニス連盟と関わるようになったのである。

続いて、コーチ就任して一年目のインド・ニューデリーで開催された第一五回世界選手権大会について質問した。荻原氏が当時仕事をしていたWEBマガジンの編集者が、その時日本ソフトテニス連盟で国際委員を務めている丹崎健一氏の息子であった。この偶然によって日本からのフォローがあり、カンボジアチームは初めての世界選手権大会への出場を決めた。当時の国際連盟には、一ヶ国でも多くの国に出場してほしい意向のもと、チーム人数が満たなくても出場が可能としており、開催国への渡航費の補助などを行っていた。現在では競技レベルが格段に上がっているが、当時の参加のしやすさもカンボジアチームの快挙を後押しした。結果は他国に全く及ばなかったが、ソフトテニス独自の戦術や、強豪韓国との対戦を通して世界のトップを知った。そして東南アジア諸国の実力も知り、自分たちの可能性も感じ、良い経験を得た大会であったと荻原氏は振り返っていた。

その後は、荻原氏の今後の予定や研究への協力の承諾を得て、第一回の調査を終了した。

第二回は、二〇二一年九月一五日、第一回と同様にZoomを用いて事前に質問を送る形の半構造化インタビューを行った。また、本調査から荻原氏のマネージャーを通して予定確認の連絡が行われるようになった。

第二回では、前回の話を基にした選手達の生活の詳細、また国際的に活躍する荻原氏から見たソフトテニスの現状等について伺った。

まず最初に、荻原氏の周辺人物となる選手や、指導を共

に行った人物について伺った。選手達については、インタビュー時は新型コロナウイルスの影響により、チーム全体が動いていない状態であり、あまり詳細の動向について掴むことはできなかった。コーチ陣に関しては、荻原氏の活動に参加したインターン生と、荻原氏が活動を共にした青年海外協力隊の人物などがいることが分かった。これらの人々には今後調査の対象とし、コンタクトを取っていきたいと考えている。

続いて、ソフトテニスの国際関係に関する質問をした。荻原氏は二〇一八年カンボジアチームが来日し、日本の高校生と合同練習を行った。カンボジアの選手達にとっては日本のレベルの高さを知り、より日本人への指導に興味を持ったという。合宿の実施にはクラウドファンディングで集めた資金を使用したが、日本連盟とのやり取りがうまくいかず、プロジェクトが頓挫しそうになったこともあったそうだ。また、それに関連した他競技にはありがちないわゆる「ソフトテニス留学」というような異国の地でプレーする例が少ないということについても、受け入れの仕組みがないのが一番の問題であり、ソフトテニスをもっと広めたい、知りたいと感じているソフトテニス後進国と、それらの対応に回る先進国との間には姿勢に違いがあると口にしていた。

質問を終えた後はこの後の研究予定を荻原氏に伝えて、第二回の調査が終了した。

第三回目は、二〇二二年五月一八日に前回と同じ方法で実施した。荻原氏一回目、二回目の内容からは変わり、この調査でのインタビュー内容は荻原氏の選手時代について調べるものであった。これを調べる理由としては、荻原氏に着目する上で、本人のライフヒストリーが必要であり、研究の直接の対象となるカンボジアでの活動だけでなく、生い立ちなども調べることで、荻原氏の指導観、ソフトテニスへの想いが見えると考えたためである。

インタビューでは、ソフトテニスを始めたところから、大学生までのそれぞれの活動についてである。インタビューを通して得た答えから整理すると荻原氏の選手生活は以下のようになる。

荻原氏は岐阜県多治見市に生まれた。小学校四年生の時、姉が始めたソフトテニスのクラブについていき、自身の友人も所属していることから競技を始めた。競技の楽しさはもちろん、一緒にやる仲間がいたのが大きかった。小学校六年生の時には、周りの仲間が全国大会出場を決める中で、荻原氏のみ出場を逃す。これをきっかけとして競技から続けることに迷いが出たが、周りの仲間に中学校で全国を目指そうと励まされ、中学校一年生の冬に初の全国大会出場を決めた。やるからには一番を目指すことを意識しており、中学校二年の夏には全国大会ベストエイトの好成績を収めるが満足しなかった。高校は他の仲間が地元近くの高校に進学する中、荻原氏は単身、遠方にある強豪東北高校に進学した。高校時代は団体での日本一を二度達成した。厳しい環境に身を置いて

日本一が現実味を帯びていたと話していた。高校では地元の強豪中京大学に進学し、ソフトテニスの継続と共に、地元で教えてくれた人々への恩返しをしたいと考えていた。大学二年生の時、ソフトテニスが今後の人生にどう役立つか考えた際に良いビジョンが浮かばなく、選手としての限界を感じるようになってきた。色んな方から話を聞き、最終的には四年生まで継続して周りへの恩返しをしようと、大学四年生まで継続することを決めた。四年時にはチームの主将を務め、大学日本一を決める「全日本大学王座決定戦」において優勝。自身三度目の日本一を達成し、これで選手生活に終止符を打った。

インタビュー後は、今後の研究予定を伝え調査を終了した。

（1）荻原雅斗氏YouTubeチャンネル「まさとMASATO」（二〇二二年七月一五日取得：https://www.youtube.com/c/ogiwaramasato/featured）

（2）荻原雅斗氏Instagram（二〇二二年七月一五日取得：https://www.instagram.com/masato_ogiwara/）

（3）「舞台はスポーツ不毛の異国　ソフトテニス荻原雅斗（上）」『日本経済新聞』二〇一七年五月一日夕刊（二〇二二年七月一五日取得：https://www.nikkei.com/article/DGXMZO15939330R00C17A5US0000/）